研究テーマ　在宅療養となった摂食嚥下障害患者の主介護者が退院直後に抱く食支援の問題

病　院　名　医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演　　者　○渡邊大地子(わたなべ たちこ)(看護師)　庄司正枝(看護師)　武山裕美子(看護師)
遠藤千恵(看護師)　菊池美咲(看護師)　佐藤和(看護師)

概　　要

【背景】
高齢化に伴い摂食嚥下障害患者が自宅退院する割合は多くなると推測される。しかし、病棟看護師による退院支援や、地域における対応は不足している現状があり、主介護者は退院直後の食支援に困惑しているのではないかと考えた。
【目的】
在宅療養となった摂食嚥下障害患者の主介護者が退院直後に抱く食支援の問題を明らかにし、病棟看護師の退院支援への示唆を得る。
【方法】
1.研究デザイン:質的研究
2.研究期間:2023年4月～9月
3.研究対象:A病院を退院した摂食嚥下障害患者の主介護者7名
4.データ収集方法
1)患者の基本属性:年齢、退院時DSS・FOIS、ALB値、専門職の介入の有無等14項目
2)主介護者の基本属性:年齢、サポート体制の有無等6項目
3)半構造化インタビューを退院1週間～10日に実施、以下を尋ね録音した。
・退院直後を振り返って食事に関して困った事
・食支援の介護困難感を「困った」「困らなかった」のどちらに当てはまるか
5.データ分析方法:インタビュー内容は逐語録化しカテゴリーに分類した。
6.倫理的配慮:A病院倫理委員会にて審査を受け承認を得た。対象者には書面で説明し同意を得た。
【結果】
主介護者7名にインタビューを実施した。主介護者の平均年齢は66.3歳だった。食支援に対する介護困難感について「困った」と回答した主介護者は3名だった。
以下、16のカテゴリーを抽出した。①入院中の内服状況がわからなかった②内服介助が大変だった③嚥下機能と食形態が結びつかなかった④入院中の食事状況がわからなかった⑤栄養管理が難しかった⑥食事の準備が大変だった⑦献立の立案が大変だった⑧食事介助が難しかった⑨水分を飲ませることが大変だった⑩食事の好き嫌いがあり大変だった⑪食事時の姿勢調整が難しかった⑫口腔ケアが大変だった⑬口腔管理・嚥下機能の情報が足りなかった⑭周囲のサポートが足りなかった⑮食事に関する責任が重かった⑯食支援のための介護リズムが整わなかった
【考察】
在宅療養において摂食嚥下障害患者の食支援は負担が大きいことが推察された。例えば、献立の立案には施設の献立表やレシピ集を提供する等の工夫が求められる。口腔ケアや内服等の問題も慎重に捉えており、障害の理解と包括的な評価・支援が必要となる。栄養管理については、地域の課題として支援のあり方を考える必要がある。情報提供や介護に関しては、退院直後は特に環境の変化で負担が大きいため、外泊や外出の体験を通じて在宅生活と結び付けながらの退院支援が肝要となる。
【結論】
摂食嚥下障害患者の主介護者は退院直後から食支援の問題を抱えているため、病棟看護師による退院支援は特に重要であることが示唆された。主介護者の多くは高齢者であり、退院前から工夫を凝らした退院支援が肝要であると考える。